

曙光

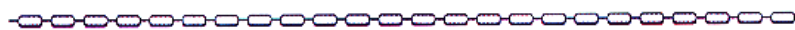


(しょうこう)

2000.10.1
東北大学大学教育研究センター広報 No.10



キャンパス風景



◎「共通基盤教育」の意義 東北大学副総長 馬渡 尚憲… 2	◎若い諸君に —「みる」ということでの雑感— 留学生センター長 田口 喜雄… 9
◎仙台圏大学間単位互換制度について 大学教育研究センター長 星宮 望… 4	◎学生からの投稿 経済学部3年生 佐渡 和彦…12 医学部3年生 岡本 宏史…13 農学部3年生 齋藤千亜希…14
◎「教養教育」の現在 教育学研究科教授 荒井 克弘… 5	◎平成12年度全学教育科目授業日程 ……………16
◎新入生のための少人数教育 「基礎ゼミ」について 遺伝生態研究センター長 大瀧 保… 7	



「共通基盤教育」の意義

副総長（総務・企画担当） 馬 渡 尚 憲

最初に少し言葉使いのことから述べさせて頂きたいと思います。といいますのは、「全学教育」というのは、教育の体制面からの言い方ですが、教育内容や教育領域からいえば、この全学教育は何を行うのか、少しはっきりさせた方がよいと思うからです。

「全学教育」は「教養教育」を行うという言い方があります。日常語としてはこれでもいいのかもしれませんが、少し厳密に考えようとすると、私にはいくつか問題が残るように思われます。1つには、「教養教育」という言い方では、かつての「教養部」で実際に行われてきた科目を指し示すことになりがちです。その際に、専門の基礎を扱う「基礎専門」が大幅に入ってきます。また言葉の意味自身からは、外国語や情報、保健体育等の科目は含めにくいことになります。困った末に、「リベラル・アーツ」という言い方も使われますが、中世ヨーロッパの「リベラル・アーツ」とは違うし、現在のアメリカのは逆に日本の専門教育を含んでいて、「教養教育」という言い方より一層曖昧なところが残るように思われます。

私は、全学教育は、大学教育における「共通基盤教育」を行うという考えがいいと思います。各学部の専門教育にとって（ということは、各研究科の大学院教育にとってもですが）、共通に基盤となる教育を行うという意味です。今年4月の評議会で承認された「全学教育改革検討委員会報告」（「報告」と略）で採用されているのもこの考えです。人間形成の上でまた専門教育を受ける上で、どの学部の学生にせよ共通に必要なことを学ぶということです。

なぜこういう教育が必要なのでしょう。最初から早期専門教育に力を入れ、大学教育の効率を挙げた方がよいという見方はいまでも一部にはあると思います。この見方ではいけないのでしょうか。本当はもっと証拠を挙げていろいろな角度から議論すべきでしょうが、私には、結局、広い裾野なしに山はそびえないということかと思われまます。大学教育で、創造力・応用力や自己陶冶力、そしてまた倫理的にしっかりした行動力、国際的感覚などを養うのに、「共通基盤教育」が是非必要だということなのです。

「共通基盤教育」は、「報告」では、①現代的な教養科目、②共通基礎科目、③基礎ゼミ、情報、外国語、保健体育といった共通科目からなっています。早期に大学教育になじみ、実践英語、情報収集・処理、健康・保健など現代社会で活躍するためのいわば基礎体力や人間形成に必要な現代的教養を身につけるとともに、共通に基礎となっているような科目の知識を得て専門教育の準備を行ってもらおうとしています。これまでの全学教育では、学生の人たち自身が一種のギャップを感じてきました。数年前の全学教育についての授業評価での学生の一番の希望はもっと基礎的、一般的なことを教えてほしいということでした。しかも、これからがもっと大変です。少子化や高校までの「ゆとり教

育」の影響が大学を直撃してきていますので、「共通基盤教育」をしっかりと行わないと、専門教育や大学院教育が成り立たなくなると思います。大学教育にとって、「共通基盤教育」が一層重要になってくると思います。

といいましても、私は、入学最初から専門教育を行うのは無理だとか、よくないと言っているのではありません。学部の専門教育についても学部の責任ではっきり入門講義とか、創造工学とか解剖基礎とかというように専門の導入科目をたてて、入学当初から「共通基盤教育」と平行しそれとの有機的関連で専門教育を行っていく必要があると思います。そうでないと、「共通基盤教育」が専門教育にとってもっている重要性やつながりが見えなくて、「共通基盤教育」にとってさえよくありません。

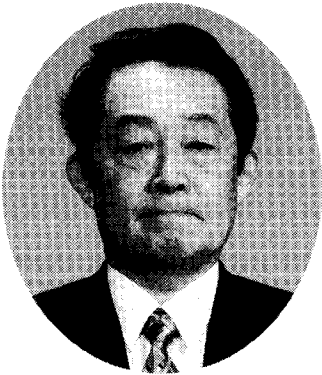
もう一つ私が気になりますのは、研究と教育の関係です。東北大学の研究は、アジア・ウイークでは昨年と今年いずれもアジア1位です。しかしそれはどうしてなのでしょう。その理由のひとつとして、研究の第一線を担っている先生方が過去にいい教育を受けておられるということをお忘れてはならないと思います。西沢潤一先生も本学の輝かしい先生をよく引き合いに出されていましたが、そのように本学で研究の第一線を担っている先生方は自分が受けた教育、育ててくれた先生たちを誇りに思いその後をついで、現在の東北大学の研究を担っておられます。

つまり、今の研究の水準は、過去の教育によって維持されているということです。今の研究は過去の教育に、従って将来の研究は今の教育に依存します。ですから、東北大学が「研究第一主義」による世界一流の「研究大学」であり続けるには、持続的に優れた教育を行っていくことが必要です。「研究大学」にとって「教育」は大切な先行投資なのです。もちろん、「教育」では研究者だけを育てるわけではありません。しかし一般的にも現在の教育は将来の社会進歩への先行投資だといえます。

単一機関でもっともノーベル賞受賞者が多いと言われるキャベンディッシュ研究所のハーウェイ先生（元所長）に学際科学研究センターの「21世紀の大学」プロジェクトで話を聞きましたが、同研究所はケンブリッジ大学の理学部の研究組織であり、学部教育ではノーベル賞受賞者を含む教授が積極的に熱心に低学年教育を行うというのが、研究組織の柔軟性ととも、成功の秘訣ではないかということでした。いま研究のためといって教育を犠牲にしていたら、将来は研究水準も「研究第一主義」も維持できないといういい教えだと思いました。

全学体制で「共通基盤教育」を行うことには、「教養学部」・「教養部」方式に比べて、体制面では不利です。責任体制を樹立するのに、工夫が要ります。しかし、いい点もあると思います。「教養学部」や「教養部」という部局の壁に阻まれないということです。全学の学部・大学院の観点から「共通基盤教育」として必要なことを柔軟に行っていくことができます。とくに、最近のように、情報社会化や高齢社会化、少子化（大学全入時代）というような環境変化、「ゆとり教育」による高等学校までの教育課程の大幅変更（「2003年問題」）というような激しい変化のなかでは、「共通基盤教育」の科目や教育方法を、柔軟に（と言っても数年単位の経験をふまえる必要はあると思います）組み替えることが求められます。

東北大学は、平成5年度から全学体制の「共通基盤教育」の道を選んだわけですから、この体制で、「共通基盤教育」の意義を最大限に実現していく必要があります。それにはまず、今年4月評議会承認の「全学教育改革検討委員会報告」を平成13年度と平成14年度で、完全実施していくことかと思えます。



仙台圏大学間 単位互換制度について

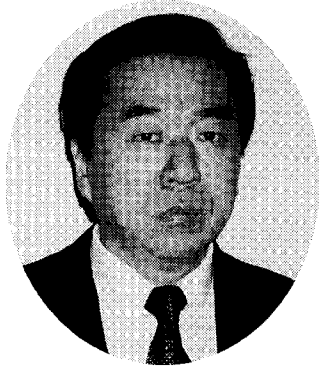
大学教育研究センター長 星 宮 望
(大学院工学研究科電子工学専攻・教授)

このたび、仙台圏大学間単位互換制度がスタートすることになります。この制度の発足の経緯とその趣旨・概要について述べます。

仙台学長会議（平成9年12月発足）の提唱で、「仙台圏大学間単位互換制度準備委員会」の第1回目の会合が平成11年5月21日に開催されました。東北学院大学が幹事校となり、仙台圏の大学・短大（18校）から準備委員会委員が参集して、約1年の間に7回の準備委員会と3回の協定書作成委員会を開催して「学都仙台単位互換ネットワークに関する協定書」をまとめました。本学からは、小生が準備委員として参加いたしました。本学では、平成12年7月18日の評議会で、協定への参加が承認されました。正式な協定書の調印は平成12年9月25日に行われ、実施は平成13年4月からになります。

この大学間単位互換制度の趣旨は次のようなものです。①学習意欲のある学生に対して学習機会を広く提供する（一大学で開講できる科目には限度があり、他大学での履修を認めることによって学習の選択肢がひろがる）。②異なる大学のもつポテンシャルを引き出し、仙台の学都としての魅力を高める。③学生の大学間交流を促進する。④大学を市民・県民に開放して多様な生涯学習の場を提供するための基礎となる（成熟した市民社会の文化的、社会・経済的、政治的発達に資する）。

単位互換の方式としては、①大学間相互乗り入れ方式、②学外共同センター方式、③学外団体等との連携方式、の3方式が考えられますが、今回は①の相互乗り入れ方式とし、各大学が選んだ科目を提供する形でスタートすることにしました。できれば、「あの大学の〇〇科目を受講したい」というような希望にもこたえるべきであるとも思いますが、それは実績をみて検討することになります。東北大学としては、全学教育科目の中の「総合科目」（現在9科目）を提供することにしました。平成13年度からは、他大学の学生諸君も一緒に机をならべて学ぶことになるでしょう（1科目10名程度まで）。また、協定締結している他大学の科目を受講することが可能になる予定です。決まりましたら掲示などでお知らせします。なお、この仙台圏大学間単位互換制度での受講は無料ですが、派遣大学、受け入れ大学での手続きについては、平成13年春までに決める予定です。



「教養教育」の現在

教育学研究科教授 荒井 克弘

大学教育研究センターから「教養教育の重要性」について書けとのご依頼をいただいた。高等教育を生業とするものの、赴任にして間もなくのことで、不眠ながら本学での教養教育の実態、議論の経過を知らない。さりとして「教養教育」論をぶつほどの教養は筆者にはない。周知のとおり、今年5月には中央教育審議会へ「新しい時代の教養教育の在り方について」の諮問があった。世間の眼はすでに教養部廃止後の「教養教育」に集まっている。以下、大学設置基準の大綱化の意義を再考し、また最近の学生たちのようすを若干ご紹介することで何とか責めを果たしたい。

一般教育から学士課程教育へ

平成3年（1991）7月に大学設置基準の改正が施行されて、学部の前期教育はさま変わりすることになった。いわゆる「大綱化」である。一般教育科目、専門教育科目といった科目区分が廃止され、卒業要件となる履修単位数の規定も解消された。大学の一般教育は戦後の新制大学発足の際に導入され、その理念は当時から高く評価されたものの、旧制大学、高等諸学校の合併によってスタートした新制国立大学では、一般教育はどこでも常に実施上の困難を抱える問題であった。昭和38年に32の国立大学に教養部が設置されたのは、担当教員組織を明確にすることが一般教育の改善に資すると考えられたからである。だが、それもまた新たな火種を提供することになった。

一般教育、教養教育をめぐる角逐は理念の問題としてではなく、つねに実施上、組織制度上の問題として生じてきた。したがって、今回の「大綱化」の措置も一部には一般教育の否定かと受け取られる向きもあった。が、専門家のおおかたの理解は、新制大学発足期の「原点」にもどって再考するのだ、そう解釈したい（黒羽亮一）というものであった。事実、大綱化の直前（平成3年2月）に提出された大学審議会答申には、「一般教育の概念・目標は、大学の教育が専門的な知識の修得だけにとどまることのないよう、学生に学問を通し、広い知識を身に付けさせるとともに、ものを見る目や自主的・総合的に考える力を養うことにあり、入学してくる学生や諸科学の発展の現状からみて、このような理念・目標を実現することが一層必要になっている」とあり、その理念は新制大学発足からいささかの後退もない。

また、設置基準の改正は大綱化の面ばかりが強調されているが、改正前にはなかった教育課程の概念、編成方針の導入にこそ注目するべきだという指摘（館昭）もある。新しい第19条の教育課程の編成方針では「教育上の目的を達成するために必要な授業科目を開設し、体系的に教育課程を編成する」、2として「教育課程編成にあたっては、大学は、学部等の専攻に係る専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮しなければならない」とある。つまり、授業科目区分の撤廃はあくまで「体系的な教育課程の編成」を促すためとい

う解釈である。

教養教育に求められる変化への感応性

いずれにしても、琉球大学を含め33になった国立大学の教養部のうち32が「大綱化」から1998年までに廃止された。科目区分が撤廃された以上、責任組織の廃止はやむをえないが、その是非を論ずることはむずかしい。ただ、多くの国立大学にあってはこの決定がその後の大学改革の手がかりを与え、学部や大学院の整備拡充もそれによって可能になったところが少なくない。

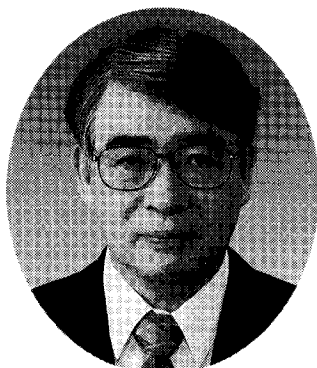
教養部廃止後の教養教育のむずかしさは、実施体制の確立もさることながら、教育課程の前提条件が年々かわっていくことであろう。例えば、今日、学生の多様化は著しい。少子化にともなう受験競争の緩和のなかで、大学入試の役割はかわり、選抜から相互選択への転換もはじまっている。もちろん、難関といわれる大学、学部を含めて一挙に体制が変わるとは考えにくい、高校教育の多様化も入試の多元化も進んでおり、その影響を免れることはできない。

数年前に、学生の授業理解度の調査を整理していて、国公立、私立を含めた20余の大学のどこでもかならず1割ほど「授業がまったくわからない」と回答する学生たちのいることに気が付いた。いわゆる大学ランクには関係がない。別の調査で、困難科目を抱える学生たちが該当数をこえるほど多いことも確認できた。入学年次の「困難科目」を尋ねた調査では、彼らが苦手とする科目が大学をこえて共通性の高いこともわかった。困難科目についてはどうやら2つの法則がある。第1は、自分の専攻に関係しない科目はいかに授業が難解であっても「困難科目」には数えないという法則である。専門外の教養科目は眼中にはない。要は単位取得までの我慢と割り切っている。第2は体系的な理論や学習の積み重ねを前提とするような科目には存外弱い。厳格に言えば、すべての学問的知識がこれに該当してしまうが、教養科目の範囲で言えば、理系では数学や物理（特に電気・電子の回路理論）、文系では経済学や憲法、心理学が多くあがっていた。こういう科目はサボるとついていけないためかと思っただけ、困難学生たちの出席率はけっして低くはない。

学士課程教育の系統性といっても、基礎科目と専門科目だけに偏っては意味がない、学生たちに広い視野をもたせ、柔軟な思考を蘇らせる、そして我慢強く学習を積み重ねる重要さも知ってもらわなくてはならない。そのためには教養教育の意義をいくら強調してもしすぎることはないであろう。要は、教養教育という以上に教養教育への入り口、導入教育に期待されるところが大きい。元来は補正教育（リメディアル教育）ともいうべき役割である。リメディアル教育というと、即補習教育と誤解されるおそれがあるが、高校科目の補習に短絡させて考えるのは誤りであろう。高校科目の補習がリメディアル教育として有効かどうかはだいぶ怪しい。学生たちをもう一度受験学習に戻してしまうことになりかねないからである。重要なことは、大学教育への招待である。大学での学習とは何か、それを実感してもらう必要がある。そのためには大学をとりまく環境の変化、学生たちの変化にも敏感でなくてはならない。大綱化から10年近くが経過し国立大学の教養部廃止もほぼ完了した。新体制の教養教育の按配がどうであるか、いよいよ評価の時代に入ろうとしている。中教審ではつきなる目標の模索もはじまった。教養教育の新体制が問われるのはこれからである。

引用・参考資料

1. 筑波大学大学研究センター『大学研究』第8号, 1991
2. 広島大学大学教育研究センター『大学のリメディアル教育』研究叢書第42号, 1996



新入生のための少人数教育 「基礎ゼミ」について

全学教育改革検討委員会
「基礎ゼミ」プロジェクトチーム座長
東北大学遺伝生態研究センター長 大 瀧 保

1. はじめに：

長い受験勉強の後に、大きな期待と学問への情熱をもって入学した新入生の夢を実現させるためには、どのようなカリキュラムが理想的であるか、東北大学では長い間、大学教育研究センターや、評議会の下に設置されたいろいろな委員会で鋭意検討が行われてきました。その結果、少人数の学生を対象とした「基礎ゼミ」が最も効果的なカリキュラムの一つとして確認され、これまで東北大学でも散発的に行われてきた少人数教育カリキュラムを全面的に見直し、このたび新たな装いで出発することになりました。そして、まだ試行的な面は残りますが、さっそく平成13年度からその一部を実施する運びとなりました。「基礎ゼミ」は東北大学の全学部、全研究所等が全力をあげて参加する全学的な教育ですので、新入生にとっては必ずや満足できるものと期待しております。多くの新入生の受講を切に希望しながら、以下にその概要を紹介したいと思います。

2. 「基礎ゼミ」の目指すもの：

「基礎ゼミ」とは、文系・理系の学生を問わず、20人以下の比較的少人数の新入生を対象にして行われる全学教育で、教官と学生および学生同士が密接な人間関係を築きながら、学生が受け身ではなく主体性をもって参加する「Face to Face」の教育です。この「基礎ゼミ」では、次のような目標の達成を目指しています。

- 1) 新入生の期待と意気込みに応え、さらに学問研究への意欲を高める。
- 2) 将来専門教育を学ぶにあたり、より広い視野と柔軟な思考力を培う。
- 3) 学問のおもしろさと重要性、学問への取り組み方、調査・観察・体験・実験の重要性、推論方法、思考の整理の仕方、考えの表現方法、学問的討議（debate）や共同作業の仕方を習得し、主体的に学問行動のできる能力を培う。
- 4) 教官と学生、学生相互間の学問的、人間的関係を密にすることによって、大学人としての意識や人間関係を育み、今後の大学における学問生活と学生生活が軌道に乗るようにする。

そしてなによりも重要なことは、大学を卒業した後も現代社会で知的市民として活躍できる教養・技法・倫理を身につけた人材を育成することです。

3. 「基礎ゼミ」とは：

「基礎ゼミ」では、各学部や研究所等から企画・提案された課題に対し、教官や学生が一緒になっていろいろと異なった面から追求出来るように計画されています。すなわち、学部や研究所等の専門教育にあまり偏重することなく、しかも東北大学で行われている先端的な学問研究にも触れることの

できるような課題を設定し、さらに複数の教官が担当することによって、その一つの課題を多方面から検討できるようになっています。高校のカリキュラムでは、国文学や物理学などというように、どちらかといえば縦割りにした学問を学習してきましたが、これからはこれらの学問知識を縦横無尽に活用できる能力が重要となります。例えば「水」という課題を考えてみますと、そこでは火星の水、化合物の結晶水、血液など生物体内の水、文学的表現上の水、水利権などの法律学的な水など、いろいろな面からの水の姿があり、これらを総合的に把握してはじめて「水」の実体を浮き彫りにすることができます。このように物事を多面的に解析する能力を養うことによって、新入生が将来より深い専門の研究教育に進んだ時に、一步余裕を持ってもう一度、より広い見地から自分の研究教育を振り返ってみることのできる能力を獲得できるものと信じています。これは将来、自分の行っている研究がどのような学問的・社会的立場にあるか、場合によってはネガティブな面からも省みることのできる能力で、科学者にとっては実に重要で必要な能力です。

この「基礎ゼミ」は2単位で、各学部とも現在のところ選択科目として取り扱っておりますが、将来はその重要性に鑑みて課題数をこの3倍以上に増やし、必修科目にできればと思っております。繰り返しになりますが、専門の異なる複数の担当教官の指導の下に、文系・理系の混じった学生が一つの課題に対して共に探求していくことは、最も理想的な教育形態の一つであり、その中で学生は実際に手を染めることのできるフィールドワーク、見学、実験、実習、インターネット情報の収集などを体験できるものと期待しております。

4. 「基礎ゼミ」を受講するには：

平成13年度の「基礎ゼミ」では、48の課題が企画されていますが、新入生はその中から興味のある課題を第1希望から第5希望までを選択し、申込書に記入の上所定の期日までに提出することになります。一つの課題に対し多くの学生が集中する場合もあり得ますが、その場合でも機械的な抽選による選別ではなく、申込書に記載された選択理由などを参考にしながら、できるだけ学生の希望に応えたクラス分けを行いたいと思っております。しかしもっと重要なことは、どんな課題を選択することになったとしても、その課題にチャレンジしていく情熱であり、未知の課題に飛び込んでいくことによって、また新たな展開が必ず起こるものです。

授業の形態は、少人数で行われる教育である特性を活かし、セミナー室などの比較的小きな教室での個人指導的な学習から、場合によっては教官の所属する研究室や施設の訪問、あるいは東北大学の施設を使っての実習や見学、時には一定期間合宿の形式で行う学習も可能であると思われます。どのような形態の「基礎ゼミ」にするかは、担当の教官と受講する学生とで工夫しながら構築して行くことができれば、「基礎ゼミ」の趣旨からも素晴らしいことであると思っております。

5. おわりに：

以上、「基礎ゼミ」に関して、期待と夢を強調しながら紹介しましたが、これらの期待と夢とが実現できるかどうかは、参加学生の主体性と情熱、そして工夫と叡知に依存していることは言うまでもありません。戦後、大学では教養教育が重視されてきましたが、その後教養教育の見直しが起こり、そして最近では種々の社会問題が頻発する中で大学における教養教育の重要性が再び叫ばれるようになりました。「基礎ゼミ」はその意味でも、有意義なものと信じています。それはともかく、希望をもって入学した新入生諸君が、是非この「基礎ゼミ」を通して東北大学の学問研究のすばらしさを体験しながら、来るべき将来に備えていただければと思っております。



若い諸君に

—「みる」ということでの雑感—

東北大学留学生センター長 田 口 喜 雄

「子供は大人の父である」タイのチャオプラヤ河畔で大きな虹をみたとき、ワーズワースの「ザ・レインボー」が口から出た。その直後、医学部の卒業謝恩会の席で「虹は何色か」と問うた。ほぼ全員が「七色」と応えた。色盲、色弱でないものには「五色」とも言えるし、波長分析をすれば400から800ナノメートルまでの可視スペクトルがあると発言したのだが……近親結婚故かサルデニア島では、中世さながらの白と黒の世界があった。信号機の赤は他と比べて大きく作ってあった。

「獅膽鷹眼鬼手佛心」という色紙が、ある病院の手術場に掲げてある。肺移植を成功させた本学呼吸器外科の先達・鈴木千賀志教授の筆。一方、婦人科の九嶋勝司教授は「鶉や鷹ではあんめえ、もっと近くでヨクみろ」と言われた。作家の司馬遼太郎氏はビルの屋上から行く人々を眺める視点を大事にしなが、散歩の途次みどり夫人とコーヒー店で、あれこれ路行く人の品定めをするのが愉しみであったという。

「目明きとは不便なものだ」と嘆じた埴保己一の話は別として「見る」ことは重要である。「見える」となるとさらに大事で、これは人間に備わった能力の際たるものの一つである気がする。動物学的には見える色の範囲も違うようであるが、視点の高さからだけで言うと「鳥の眼で観る」こと、すなわち「俯瞰する」ことと、「虫の眼で視る」こと、すなわち「凝視する」ことと、「人の眼で見る」こと、すなわち「認識する」ことが重要ではないか。それも「色眼鏡」でなく「裸眼」でみるのが。加えて「医者眼で診る」「看護者の眼で看る」ことも必要としたが、この齢になると「患者の眼でみる」ことも要求するようになっている。

レーザーで口径1ミリ2ミリの血管を接合ぐことに成功した夜は興奮した。直ぐ発表しようと文献を調べたら、すでに先人の論文があった。後からのことだが、桂重次先生は食道癌の手術中、大動脈からの出血に際して「電気メス」と言われた由。熔接の原理で、血管成分のコラーゲンをハンダの糊としようと考えたのであろう。同様の発想をレーザーを使用して顕微鏡下に行なった。そのとき「見える」から「手が動く」ことを実感した。それにしても「米粒に字を書く」中国人の技術は「眼の機能」が違っていただろうか。われわれの眼は退化したのだろうか。細かい細工のほどこされた展示を観ながら、愕然とした台北の故宮博物館。ヒトという素晴らしい生き物がいるという感銘がよぎった。

眼鏡、望遠鏡、顕微鏡に始まる「見るため」の補助手段は格段の進歩をとげた。それもX線や音波

など通常の視座外の波長や偏光までもを可能にし、原子や分子の世界を覗けるだけでなく、その配列の乱れまでも制御できるようにしてきた。研究が微に入り細に入り、分析は詳細を極めている。「群盲象を撫でる」類いの現象も出てきて、ガリバーの小人国の国王の体験、すなわち専門家の視点での報告では、埒があかず、王自らの出馬を必要とした文学社会の先見性という想いも走る。

「私が常日頃から思っていることなのですが、家鶏のことを調べるからといって、家鶏ばかりみても駄目なのですね。その周辺がわかってこない、全体がみえてきません。たとえば、植物は家鶏に深く関係してきますし、他の動物も関係します。さらに民族の信仰、習俗、服飾や音楽などにも目配りしなければなりません。点でみていくと、なかなか全体がみえてこないのですが、全体をざっと広げて面で見るとかくれていた要素がみえてくるのではないかと思います」最近手にした本、秋篠宮文仁編著『鶏と人』の結論的な言である。後年『三四郎』の広田先生をして「日本は滅びるね」と言わしめた夏目漱石が「日本人の眼はより大ならざるべからず」といみじくもロンドンの下宿での書き付けと一般であると解釈したい。

医学の文献雑誌インデックス・メデイックスが、学生時代10年分を製本して2キロだった。今や1トンの時代。ケミカル・アブストラクト通称ケミアブという化学のそれは、当時から医学以上と言われていた。コンピューター時代の医学の項目事項は年間10万件を越したという。寝ないで眺めるだけでも5分間で1項目の時代。知識の鵜呑みは、それが血となり肉となる前段階での消化不良をひき起こしかねない。強靱な知力形成には齟齬と燕下そして消化。加えて快便。

大学は「虫媒花」のように「甘い蜜」を生産し、蜜に呼び込む「花の構造や色調」を「伝統」と語り続くことで存在しえた。「お題目」を唱えていれば良い時代があった。ところが、いわゆる・IT現象なる「風媒花」が大学の内外に種子を蒔き散らした。また、そこに巣をくう「霊媒体」との相克あるいは超克も課題となってきた。これはこれで、新しい大学の創造にも繋がることであろう。「知る権利」などと嘯いていられる時代ではなくなる。情報を提供しているのに「知らない」なんて「知る義務」を果たしていないと。現に、われわれの常識では考えられない多くの決まり事の氾濫する世の中。文明は「コンピューターを使えないものは、その脱落者」と決め付ける。文明自体の自己撞着の波浪は荒れこそすれ、凪はない。

砂漠の民に代表されるイスラム系の国旗は「三日月と星」に代表される。バイキングを始め未知の国に航海をした民は、陽の光も必要としたろうが月と星は「風」とともに大事な路標であった。万人共通の文明だけでなく、人それぞれの違い・文化度という温度差は「多様」を認識し「共生」という羅針盤を必要とする。その際、面舵をとるか取舵一杯とするか、判断の決定をリーダーは下さなければならない。「私」と「公」との葛藤を倭小化する風土は、ヒトを含めて生物体の生存の基本でもある。ヒトが人間として、希望を未来に託せる存在であり続けた基本は、即物的ではなかったことであろう。それがため「視座」に立脚した「見きり」の行動が求められる。

下宿の押し入れを改造して、一畳の書斎として語学や古典に耽溺していた頃、目標は「岩波文庫を背の高さ読む」ことであった。乱読と精読。アミエルに沈潜した夜と朝のゲーテと希望。「大学は君

たちを百科事典にするところではないヨ」と言われた西洋史の山脇重雄教授の日露戦争の浄書や民主主義の歴史の下調べやら筆耕を。解剖学の浦良治教授にはエスぺラントの理念と比較解剖学的な「ものの見方」を。法医学の村上次男教授からは「若い時の精一杯」と「信用」ということで、新聞発行を手掛けた以上は発刊日をきちんと守るよう。外科の武藤完雄教授の口癖は「後生畏るべし」、現実・未来をいろいろ示唆された。恩師の話は尽きることがない。

大学という「人を育成する機関」には、栄養素のほかに「良い水」と「光」が存在し続けて欲しい。「学の風」とでも言おうか。それは、願いであり「種子」や「苗」がいずれ開花して大きな稔りとなる期待でもある。教師は「光」として存在して欲しい。諸君のアクセプターは「光」という粒子を無限に受けとめることができるからだ。教師の慈愛ある眼指しは、たとえ厳しいと感じても「光の発振源」であると信じている。古典といわれるものも人類全体の太陽「光」と感じている。

「光」と違い「知識という情報粒子」は、限られた空間でしか収容できない。半可通であるが、学んでのち「無」になり・「空」になることを「悟り」と。それは「光明」でもあると仏像は「光背」で象徴している。情報の氾濫に対処するため、知識の消化不良になって偽りの悟りである「魔境」を彷徨わないで欲しいと願う。よしや「魔境」免疫の獲得を。リアリズムでモノをみることに努めてきたものの言として、物を摂取するには「排泄」「発散」が大事と。生体には栄養動脈があり、それに随伴した2本以上の排出静脈がある。基礎体力をつけ、鍛練に励む若き日々はとくに新陳代謝が激しい。汗が「光」となり、輝く日は必ず訪れよう。

自身の研究生活は、手探りの臓器移植の研究から始まり、その臨床応用さらには医療としての定着へと進んだ。そのため、多くの先輩・同僚・後輩のお世話になった。とくに市井の人々の「ものの見方」には、学ぶところが多かった。いま、外国人学生からも教えられることの多いのを感じている。まさに「目から鱗」である。「ものの見方」は個人のアイデンティの古里の表現であり、光彩を放つ。

恩師・葛西森夫教授は「素心」と色紙に書かれるのが常であった。その心を「貧しきものは幸いな」という聖書の言葉が好きだと言われた。新鮮で、自由・潤達こそが学生である。勤勉なる・充実した日々を送られ、友情の旺んることを祈念して筆を擱く。

学生からの投稿



全学教育の感想

経済学部3年生 佐渡和彦

いろいろ縁があって、「全学教育についての感想」を書くことになったが、はっきり言って、私自身はこんな感想を書く立場にないような気がする。と言うのも、単位は取ったものの、かなりの講義の時間を「睡眠時間」として過ごしてきたからだ。経済学部内にはまじめに講義を受けてきた人がたくさんいるはずであり、その人たちに申しわけないと思いつつ簡単に自分なりの感想をまとめてみたい。

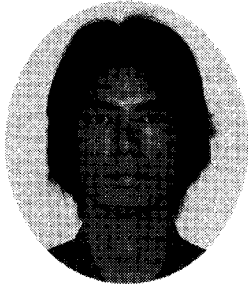
経済学部生は2年から3年になる際には、定められた全学教育科目をすべて履修し終わっていないといけない。履修し終わっていないとすぐに留年が決定してしまう。全学教育科目の中でも教養科目は1年のうちにすべて単位を取ることができるが、外国語教育科目はどうがんばっても2年まで履修しないといけない。3 Semesterまでは「単位が取れなかったら次の Semesterで再履修……」という気持ちでいられるが、余裕がなくなるのが4 Semester。3 Semesterまでいくら順調に単位を取得していても、ここで単位を落としてしまうと水の泡。だから、私自身も含めて経済学部生は4 Semesterの講義を一番まじめに受けているのではないかと思う。

ただ、まじめに受けていたからといってその講義にそれほど興味があつたわけでもない。悪い書き方をすれば「単位をとりたい」ために、まじめに受けていただけだ。私自身の中で「興味を持った科目は……」と振り返ってみると、全然今の自分の専門とは違う、薬学部の方に教わった講義だと思う。私は、高校時代は勉強し

なかったせいもあり化学はまったくだめだったが、理科の中でも生物だけはとても好きだった。大学に入学してシラバスを見たときに、生物と関連がありそうな科目として興味を持って選んだ科目が、この講義だった。冒頭にも書いたとおり、自慢ではないが私はかなりの講義を睡眠時間として過ごしてきた。ただこの講義だけは、大部分の時間起きていたという記憶がある。

この講義がその後、私の専門科目である経済学を勉強する上で役立ったということは今のところ全くないし、これからもないであろう。当然のことながら経済学と生物は何の関連もなさそうであるから。ただ、「自分が専攻としている分野以外にも、興味関心を持っている科目がある」という学生は、けっこういるのではないかと思う。自分の専攻している科目は、学年が上に進むにつれて専門科目としてより深く勉強できるが、「興味はあるが専門ではない」という科目を勉強する場として提供するのが、全学教育の役割のひとつではないかと思う。私は、多少はそういう気持ちで全学教育科目を履修していたと思う。

全学教育では、多くの学生が興味関心を持った科目を勉強できるように、多種多様なメニューを揃えてほしい。東北大学は10学部を擁する総合大学であり、各学部の先生方に協力していただければ、他大学ではなかなか真似ができないくらい豊富なメニューを提供できるのではないか。まあ、大部分の講義を眠っている学生が言っているのもので、説得力はないと思うけれど……。



全学教育科目を終えて

医学部3年生 岡本 宏 史

入学してから2年間全学教育科目を履修してきていくつか感想を書こうと思う。川内のパンキョーはつまらん、とよく言われるが、これは学生、教官双方の意識に問題があると言えると思う。まず学生であるが、高校までと違って大学での授業はかなりの割合で自主性が求められる。担任というものがなく、教官はその授業だけの教官であり、一人一人に注意を向けることが不可能になっているため、学生側からアプローチしていかないと講義の意味が半減してしまう。出席を取らない授業も多いので、さぼる学生も多い。また特に医学部の学生から見ると、1年から専門科目が始まること、川内での成績は進路に関係無く、とにかくCでも単位を取れば良いこと、などからどうしても川内の授業は軽視されがちである。教官について思ったことは、やる気のある教官とない教官に差がありすぎることだ。これは特に英語、ドイツ語などの語学で感じたことである。やはりやる気のある教官の授業は面白いことが多いし、（やる気がありすぎて厳しすぎるということもあるが）そのため学生側のやる気にもつながる。逆にやる気のない教官の授業は魅力がないし、これでは学生側もついていくはずがない。学生側の意識の向上や積極性は重要だし、学生側に反省すべき点は多いのだが、教官の講義に対する情熱というものも授業を活性化する上で、非常に重要な要素であると思う。実際、熱く講義する教官の授業というものは（内容は忘れても）、熱かったという印象が強く残っているものである。

また、教官のやる気や授業の面白さ、出席の厳しきなどに差が出てくると、取る授業によって不公平感が出てしまう。そのへんはやはりできる限り統一して欲しいものである。社会系の科目については全体に面白かったという印象である。自分の興味ある講義が選択できるからであろうか。ただ、専門や必修科目が多く、選択の幅が狭いのが難点であった。選択の幅があるということは、学生が自分で考え、自分の責任で講義を選択できるわけだから、学生のやる気にもつながると思う。その点、語学は選択ができず、そのため学生側が受け身になることにつながっているのかもしれない。あと、せっかくの総合大学という特徴があまりないということを感じた。川内の2年間くらいはいろいろな学部の人と交流できる授業環境ができないものだろうか。特に医学部がサークルなどでも孤立してしまっていることもあるのですが。

僕たちの下の学年から少しシステムが変わっているようであるが、とにかく川内の2年間というのは無駄にするにはもったいない時間であるし、幅広い教養を身に付けるきっかけになりうる十分な期間であると思う。大学に入ってきた新入生が東北大に入ってよかった、と思えるような環境作りをこれからもして欲しいと思います。まとまりのない文章ですみませんでした。

最後に、意見を出してくれた同じ総代の野上君に感謝します。



全学教育についての感想

農学部3年生 齋藤千亜希

大学教育を受けるようになって3年目になります。今回、この機会に大学教育について、特に1、2年目の一般教養について考えてみました。これから私が述べることは、私がこれまでに実際大学に通って経験し、感じてきた率直な感想です。もちろん私個人の意見なのですが、おそらく、私以外の他の学生も実感してきたことだと思います。これを読んでくださった先生方の授業改善の助けに少しでもなればと思っています。

大学入学してまもなくの頃は、まだ勉強しようというやる気がたくさんありました。しかし、そのやる気も長くは続きません。高校までは、詰め込みがたの学習ではありましたが大学合格というはっきりとした目的があって、寝る時間を惜しむほど勉強をしてきました。それが、大学に入って、午前中しか授業がない日などあり時間が一気に増えて、これといった明確な目的があるわけでもなく、気が緩んでしまったのです。楽を覚えてしまったともいえます。しかし、単に生活が変わったからというわけではなく、大学の授業が期待していたものと違っていたためにやる気が損なわれたという面も大いにあると思います。私の場合、とりわけ数学、物理の授業でそうでした。高校で学んできたことから一気にレベルアップした内容であったと思います。特に物理は高校で選択していなかったため

に、授業内容はほとんどわからず、他の授業についても、授業を聞くよりも、自分で教科書を見ながら勉強したほうがわかりやすかったものが多くありました。一番楽しかった授業はスペイン語でした。この授業は、授業の方法やテストの形式に先生の工夫が大変見られ、高校時代より確実に衰えた英語に比べ、英語と同じくらいのカリキュラムで学んだスペイン語は、身に着いたという実感がありました。

他の一般教養の科目も、大学側のねらいとしては、専門に偏った識見の狭い人にならぬよう、広範・高邁な学識を身につけ、良識を持ち、豊かな人間性を身につけることなのでしょうが、学生が実際選ぶのは、単位の取りやすい、評価が甘い、楽勝科目であって、結局のところは将来の専門に関係ないということで、その場しのぎの勉強しかしていません。

もちろん授業の行い方が悪いとは一概には言えません。学問に対する意欲、探究心を持ってほしいと、熱意を持って、最もよい授業を行うため創意工夫をしながら授業を行っている先生方もたくさんいました。そういった先生方は学生からの反応が返ってこない、頭を抱えていると思います。「質問は？」とたずねても教室が静まり返るだけといったことが殆どではないでしょうか。学生のニーズ、要望があって初めて授業改善ができるのであって、学生のそうい

う意欲が見えず、学生の質が落ちたと嘆かれても、学生の私としても返す言葉はありません。

専門の授業になると、先生とじかにコミュニケーションをとる機会が増え、先生と学生の距離は縮まるので学生の声は届きやすくなりますが、一般教養では人数が多いこともあり、先生と学生の距離はかなり遠いものとなっています。しかしそれでも、私が習ったスペイン語の先生のように、学生との距離を縮める方法はあ

るのだと思います。学生が変わらなければ、授業の改善もできないと言われるのももっともですが、先生方の教え方ひとつで、単純な学生たちは勉強への取り組みが変わります。学生一人の意識を変えれば、周りの学生まで感化され変わることだってあります。

一般教養の授業が、単位獲得だけで終わるのではなく、本来の目的にあった授業になることを期待しています。

「曙光」(しょうこう)の由来について

曙光とは、朝の太陽の光であることは、説明は不要であろう。

ドイツの哲学者フリードリッヒ・ニーチェは、キルケゴールと共に虚無主義者と呼ばれる。然し、私は彼等を虚無主義と呼ぶのは誤っていると考えている。原本を読まれば直ちに判ることであるから此処には書かない。ニーチェであれば「ツアラツウストラはこう語った」あたりが分り易いと思う。

人間は妄執にとり巻かれている。今日の妄執の第一は偏差値であろう。諸君らの憎き偏差値は、君らの能力を示していない。例えば、岩波新書「天才」宮城音彌先生著を読みたい。他にも類書は数多くある。

君らの周辺に信ずべきものがあるのか。次から次へとニーチェは粉碎してしまう。もうやめてくれと云ってしまう程、何でも打ち壊す。考える輩はつよい。何でも突き破る。これがニーチェの著曙光である。然し、或る日、遂に壊れないものを見出す。そしてツアラツウストラ、つまり、君は、意気揚々と山を降りて里に向う。その君を照らすのが曙光である。若い君の力を輝かすように太陽はやさしい美しい光を君に注ぐのだ。

諸君、壊れるものをすべて壊し、本当に壊れないものを君の心の中に把め、それも、すぐ壊れてしまう。それが壊れたらすぐまた、本当に壊れないものを夢中になって把め、そして、本当に曙光を浴びる強い、あるいは、たをやかなる若人になれ。

(命名及び表紙題字) 前東北大学総長 西 澤 潤 一

平成12年度全学教育科目授業日程

10月2日（月）～12月22日（金）	第2・4セメスター授業
10月13日（金）	履修カード提出期限
10月13日（金）	履修科目届提出期限
11月3日（金）～11月6日（月）	大学祭（11月6日 休講）
12月25日（月）～1月5日（金）	冬季休業
1月9日（火）～1月26日（金）	第2・4セメスター授業
1月19日（金）	大学入試センター試験実施に伴う休業
1月29日（月）～2月9日（金）	補講
2月13日（火）～	学期末休業

大学教育研究センター広報の合併発行について

※『大学教育研究センター広報』は前号（第9号）まで、「ニュース」を教職員用、「曙光」を学生用として各々発行してきましたが、本号より合併し、誌名を「曙光」として発行することにいたしました。

発行 東北大学大学教育研究センター

Research Center for Higher Education,

Tohoku University

〒980-8576 仙台市青葉区川内

インターネットホームページアドレス <http://www.high-edu.tohoku.ac.jp/>